

有漏定等なり。一師唯有觀心一意等とは、此は且く与えて論を為す。奪えば則ち觀解俱に闕く。世間の禪人偏に理觀を尚び既に教を諳んぜず。觀を以て經を消し、八邪八風を数えて丈六の仏と為し、五陰三毒を合して名けて八邪と為し、六入を用て六通と為し、四大を以て四諦と為す。此の如く經を解するは、偽の中の偽なり。何ぞ浅く論ずべけんや」等云云。止觀七云、「昔鄴洛の禪師、名は河海に播き、住するときは則ち四方雲のごとくに仰ぎ、去るときは則ち阡陌群を成し、隱々轟々亦何の利益か有る。臨終に皆悔ゆ」等云云。弘七云、「鄴洛の禪師とは鄴は相州に在り。即ち齊魏の都する所なり。大に仏法を興す。禪祖の一なり。其の地を王化す。時人の意を護りて其の名を出さず。洛は即ち洛陽なり」等云云。六卷般泥洹經云、「究竟の処を見ずとは、彼の一闡提の輩の究竟の惡業を見ざるなり」等云云。妙樂云、「第三最も甚だし、転た識り難きが故」等。無眼の者・一眼者・邪見者、末法の始の三類を見べからず。一分の仏眼を得もの此をしるべし。

「向国王大臣、婆羅門居士」等云云。東春云、「向公処毀法誘人」等云云。夫昔像法の末には護命・修円等、奏状をさへげて伝教大師を譏奏す。今末法の始には良觀・念阿等、偽書を注して將軍家にさへぐ。あに三類の怨敵にあらずや。当世の念仏者等、天台法華宗檀那の国王・大臣・婆羅門・居士等向云、法華經は理深、我等は解微、法は至て深、機至て浅等申うとむるは、「高推聖境、非已智分」の者にあらずや。禪宗云、法華經は月をさす指、禪宗は月也。月をえて指なにかせん。禪は仏の心、法華經は仏の言也。仏法華經等の一切經をとかせ給後、最後に一ふさの華をもつて迦葉一人にさづく。其しるし